



Title	Clinical Outcome of in Vitro Fertilization-embryo Transfer in Patients Over 40 Years from a Single Institution in Guangdong, China( Abstract_論文要旨 )
Author(s)	林, 彤
Citation	
Issue Date	2014-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/29031">http://hdl.handle.net/20.500.12000/29031</a>
Rights	

(別紙様式第3号)

## 論 文 要 旨

論 文 題 目

Clinical Outcome of *in Vitro* Fertilization-embryo Transfer in Patients Over 40 Years from  
a Single Institution in Guangdong, China

(41歳以上の高齢不妊女性に対する体外受精・胚移植の臨床治療成績)

氏 名 林 彤 印

## 論文要旨

生殖補助医療の進歩はめざましいものがあるが、41歳以上の女性に対する不妊治療は難渋することが多い。その大きな原因は卵巣機能の低下であり、採卵数は著明に減少し、卵の質にも低下を認める。排卵誘発剤：Human menopausal gonadotropin (HMG) を使用した調節卵巣刺激を行っても採卵数の増加は期待できず、高齢女性に対する適切な卵巣刺激方法が模索されている。広東武警辺防病院生殖医療センターでの治療成績の向上と受診患者に有用な情報を提供するために、治療した41歳以上の患者の体外受精・胚移植 (in vitro fertilization-embryo transfer : IVF-ET) の治療成績と卵巣刺激法の違いによる成績を検討した。

2008年1月～2011年9月の期間に、初回IVF-ETを行った41歳以上の女性272例を対象とし、その治療成績を後方視的に解析した。さらに、調節卵巣刺激方法により対象をA:

GnRH agonist long protocol with short-acting drug 法（治療前月経周期の黄体期より低用量の GnRH agonist を連日投与し、治療周期の月経3日目より HMG 注射を実施した）、B: GnRH agonist long protocol with long-acting drug 法（治療前月経周期の黄体期より高用量の GnRH agonist を単回投与し、治療周期の月経3日目より HMG 注射を実施した）、C: GnRH antagonist protocol 法（治療周期の月経3日目から HMG 注射を投与し、卵胞直径が 14mm になった時点で antagonist を投与した）、および D: microdose GnRH agonist flare protocol 法（月経2-3日目に低用量 GnRH を単回投与し、月経4-6日目から HMG 注射を開始した）の4群に分け、治療成績を比較した。

対象患者の平均年齢は 42.5 歳、移植当たりの妊娠率と生児獲得率はそれぞれ 20.3%、9.1%、流産率は 46.8% であった。年齢別の生児獲得率は、41 歳で 15.6%、42 歳で 6.4%、

43歳で6.3%、44歳以上で4.5%と年齢とともに急激な低下を認め、41歳と42歳以上を比べると、42歳以上で有意に生児獲得率の低下を認めた ( $p=0.0165$ )。妊娠群と非妊娠群の比較において妊娠群では、年齢は有意に高く ( $p=0.0078$ )、採卵数は有意に少なかった ( $p < 0.0001$ )。多変量解析では年齢(42歳以上)と採卵数(4個以下)が妊娠成立や生児獲得に好ましくない因子であった。

調節卵巣刺激方法の異なる4群間において、Group CとGroup DはGroup AやGroup Bと比べて、HMG投与量と使用期間が有意に低値であった ( $P < 0.01$ ) が、4群の妊娠率について有意差を認めなかった。以上より、41歳以上のIVF-ETにおける調節卵巣刺激法として、治療による患者の身体的、経済的負担軽減を考慮すると、microdose flare protocol法やantagonist protocol法が望ましいと考えられた。